

白井ミトン

シンガーソングライター/ラジオパーソナリティ

僕がこれまで観て来た映画の中で最も「ブルージー」な作品かもしれない。
誰かに「ブルースってどういう音楽？」と訊かれたら、
まずはこの映画を観てもらおうことにしよう。

北中正和

音楽評論家

ニューヨークで暮らす若いカップルの物語と
B・B・キングをはじめとする伝説の彼方のブルースマンたちの演奏が交錯する。
監督はギリシャ生まれヨーロッパ育ちの反骨の人。
ブルースへの共感と距離感のこもる映像から
70年代初頭の空気も伝わってくる。

久住昌之

漫画家・ミュージシャン

ブルースは、確かに悲しみとか苦しさを歌う魂の音楽なんだけど、
そこに「ユーモア」があるから残ってるんだとボクは思う。
この映画のダメダメな主人公も「あーあ、こいつときたら…」なんだけど、
今テレビをつければ闇バイト殺人のニュースをやってて、
現代の日本も変わりゃしない。
そこでBBやバディやサニーの音楽を聴くと、
いつでも自然に笑顔になり、本当に救われるんです。

KOTEZ

ハーモニカ奏者

切なすぎて笑っちゃう時
どうしようもなくやりきれない時
好きすぎてたまらないけどどうもいかない時
そんなときに BLUES はやってきます

本物の BLUESMAN から勇気をもらいました
BLUES が好きでよかった

佐野史郎

俳優

1960年代後半にヒットチャートを賑わしていた
ローリング・ストーンズやジミ・ヘンドリックス、クリームから知った
黒人ブルースというジャンルだったが、
この映画で初めて少年時代に戻って、その真髄に触れた気がした。
折しもこの映画が制作された1973年は
ブルースを基としたハードロックの終焉の年だったと個人的には感じている。
その訳が、この映画に隠されているのだろうか？
「あまりに理不尽だ。なんでこんな苦勞を？」
その反抗の魂が消えることは人種を問わないだろうけれど、
逃げ場を失い、その感情に慣れ、
感じなくなることの恐怖をひしひしと感じる。
あれから、ずっと、そうなのだろうか？

高橋健太郎

音楽評論家

フィクションとドキュメンタリーを交錯させながら、
ブルースという音楽が何を表現しているかを抉り出す。
こんなフランス映画があったとは。
この時代だから撮れた生々しい映像満載。
ブルース=渋い音楽などと思っていると、
お洒落なジュニア・ウェルズとバディ・ガイの
ひりひりするような競演や
牧師のように爆発するB・B・キングにぶっ飛ばされるよ。

立川直樹

プロデューサー/ディレクター

ハーレムに住む若いカップルの物語と
B.B.キングをはじめとする伝説的なブルース・ミュージシャンの
ライブ・パフォーマンスとのマジカルなドッキング。
こんな映画、今まで観たことがない。
制作から50年経っても全く色褪せていないのが驚き…。

土屋公平

ミュージシャン

Bluesがどういった境遇から立ち上がってきたかを知るの大事だよ。
厳しい生活や辛い感情に直結する歌を歌うのは
恐ろしくヘヴィであり時にはちょっとした気晴らしでもある。
そしてその歌は大スターを生み出すほどのパワーをはらんでいる。
50年前に撮られたBlues美学ともいえる貴重な映像を
堪能させてもらいました。
ジュニア・ウェルズ&バディ・ガイのパフォーマンスも最高だし、
B.B.キングさんのインタビューはぐっときた。
個人的な大発見は70年代初頭の(あの)ルシールのブリッジが
ナイロン・サドルだった事。。。
ちょっとマニアック過ぎるかな(笑)

88分のBlues鑑賞旅行、いい時間をありがとう!!

鶴澤津賀寿

義太夫節三味線演奏家(人間国宝)

インタビューの言葉が、リズムが、そのまま歌のようであり、
そこに同時に歌がはさまれ、セリフが重なり合い、
ブルースと呼ばれる音楽が、
それぞれの生活や思い、身体の内側から絞り出される過程が見える。
演奏はこうあるべきと思う。

永井ホトケ隆

ブルース・ザ・ブッチャー

ノンフィクションとフィクションが交差する映画だが、
ブルースをプレイする自分には各ブルースマンのライブシーンが興味深かった。
どのブルースマンの映像も貴重なものだが
同胞の黒人聴衆を前にしたB.B.キングの圧巻のライブは
ライブ全編を観たいと思う必見の熱さだ。
バディとジュニアのライブの匂いも秀逸。

パール兄弟 サエキけんぞう

衝撃的なインパクト!
今まで味わったことのない肉体感覚満載のカオス感!
至近距離で仰ぎ見る黒人ブルースの凄み!
挿入ドラマも生々しく、本物の現場が香り立つこの映画を体験したら、
貴方の価値観が変わること請け合いである。



真島昌利

ザ・クロマニヨンス

楽しい時、ブルースを聴く。
さびしい時、ブルースを聴く。
きれいにすんだ泥水のなかで、
ただブルースは凜として突っ立っている。

ひとりぼっちだ。
ブルース・イズ・オールライト!

三宅伸治

ブルースマン

ブルースとは、何か?
貴重なブルースマンたちの叫びの声と、
若い2人のリアルな生活が重なって...
ブルースから、誰もが逃れられない事を改めて思い知った。
だからなのか...

ブルースという音楽は、
いつでも聞きたびに力が湧いてくる。

矢田部吉彦

前東京国際映画祭ディレクター

ブルースのルーツに奴隷労働を見るのは間違いではないが、
ろくでなしの哀感こそが
ブルースの背骨なのだと痛感する。
ドラマとドキュが融合し、70年代インディ映画の香りと
ブルースの真髓を伝える本作の発掘は事件だ!



<http://blues.onlyhearts.co.jp>

湯川れい子

作詞・音楽評論

この映画を見たら、
私はB.B. キングが好きで良く聴いて来ました、
なんて、恥ずかしくて言えなくなりました。

私はブルースを知らなかった。
ブルースがこんなに真っ黒で、
男と女の涙と愛液にまみれたものだったなんて...。
パディ・ガイやブッカー・T・ホワイトが聴けるのも素晴らしい。
まるでドキュメンタリーのような、
迫力とエネルギーに満ちた凄みのある映画だ。

ROY

THE BAWDIES

BLUESは光輝く華やかなものではなく、
地下室のじっとりするような日常から、
もがき、嘆き生まれる魂の叫びだ!
その生々し、臭いまで漂ってくるリアルな作品!

Featuring
B.B. King
Buddy Guy
"Furry" Lewis
Mance Lipscomb
Brownie McGhee
Jimmy Streete
Roosevelt Sykes
Sonny Terry
Junior Wells
Bukka White
Robert Pete Williams



ブルースは
心に浮かぶ感情なんだ
分かるか?
望みがかなわなくて
つらいとか
金欠なのに
あそこに行きたいとか
着る服がないとか
だけど究極のブルースは
愛する人に
捨てられるってやつだ

ブルースの魂

THE BLUES UNDER THE SKIN 2022年2K修復版

Directed by Roviros Manthoulis

Screenplay by Roviros Manthoulis and Claude Fléouter
Photographed by Fotis Mesthenaios
Executive Producer Guy Neyrac Associate Producer Claude Fléouter
With Roland Sanchez Onike Lee Amelia Cortez William L. Evans
Featuring B.B. King Buddy Guy Walter "Furry" Lewis Mance Lipscomb Brownie McGhee
Jimmy Streeker Roosevelt Sykes Sonny Terry Junior Wells Bukka White Robert Pete Williams



B.B. キング生誕100周年記念公開

監督: ロバート・マンズーリス
B.B.キング パディ・ガイ ジュニア・ウェルズ ルースヴェルト・サイクス
ロバート・ビート・ウィリアムズ マンス・リブスカム ブッカ・ホワイト ソニー・テリー ブラウニー・マギー
ファリー・ルイス ジミー・ストリーター ローランド・サンチェス オニケ・リー
アメリカ・コルテス ウィリアム・L・エヴァンス

Comments

コメントをお寄せいただいた方々 (50音順・敬称略)
白井ミトシ / 北中正和 / 久住昌之 / Kotez
佐野史郎 / 高橋健太郎 / 立川直樹
土屋公平 / 鶴澤津賀寿 / 永井ホトケ隆
パール兄弟 サエキけんぞう / 真島昌利
三宅伸治 / 矢田部吉彦 / 湯川れい子 / ROY

1973年(2022年デジタル修復版)/フランス/英語/88分/1:1.33/字幕:福永詩乃/原題:Le Blues entre les dents
©1973-2022 NEYRAC FILMS
配給:オンリー・ハーツ 協力:ブルース&ソウル・レコーズ

12/28(土)公開

新宿駅東南口階段下 甲州街道沿ドコモショップ左入ル
新宿 K's cinema
03 (3352) 2471 www.ks-cinema.com
各回入替・整理券制

吉祥寺 PARCO B2F
UPLINK 吉祥寺
0422-66-5042
joji.uplink.co.jp